

2013年2月 山なかま・シリウス例会 研修会 報告

■『見落とし易い春山の気象』～天気図から読み解く気象遭難の防止～

報告:藤野

【講師】:大塚会員

【開催日】2013年2月21日(木)

【会場】国立オリンピック記念青少年総合センター・センター棟302号室

【受講者】山なかま・シリウス会員16名

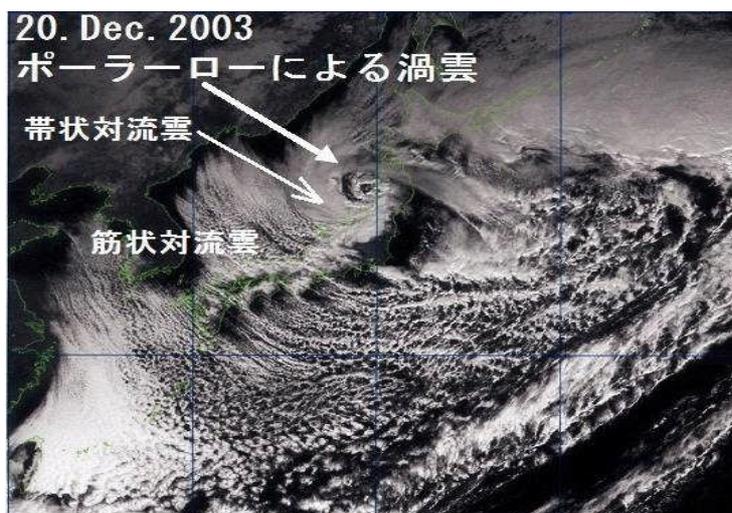
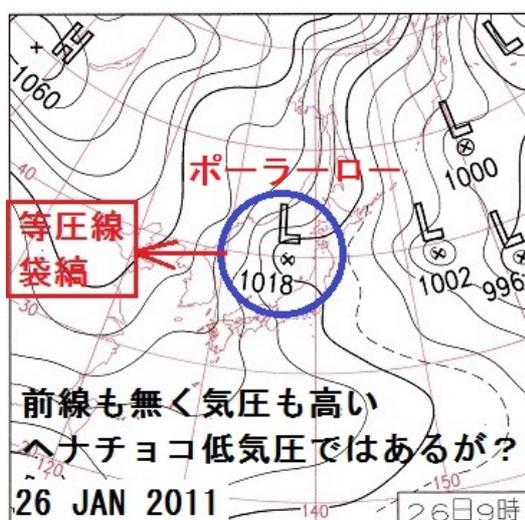
近年、登山中に悪天候に遭遇し、遭難する事例が目立つように思うことから、当会においても気象遭難防止の観点より、大塚会員に講師をお願いして研修会が実施された。

研修会の中身は大変濃く資料も膨大で、これを簡潔に「報告」するのは、至難の業でとても私の能力の及ぶところではないが、講師への感謝の気持ちと、当日欠席された方々への情報発信を兼ねて、報告を書くことにします。

「一般に厳しい冬が過ぎ、暖かい陽射しの春山になると、誰もが山に行きたくなるものであるが、春山は気象の変化とスピードが激しいことから、まだ大丈夫と思っているうちに急激な悪天候につかまってしまい、悲劇が起こることがある。」これは講師の最初の言葉である。肝に銘じたいものだ。

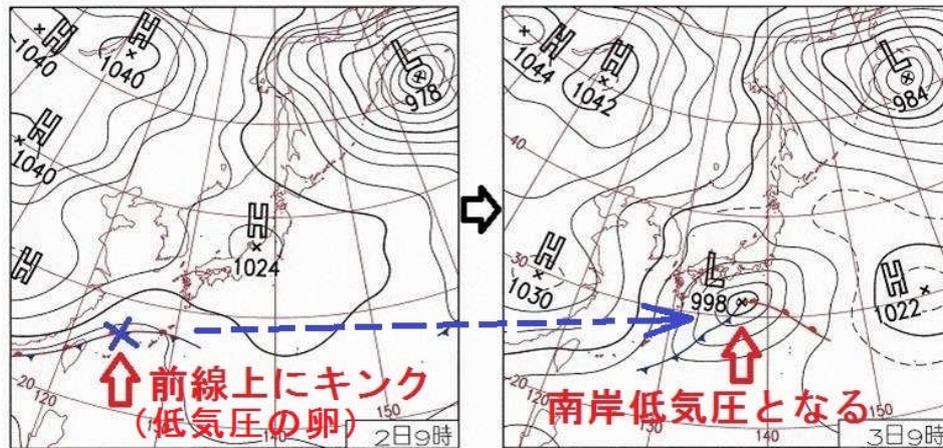
取り上げられた悪天の種類は、「爆弾低気圧」、「ポーラー・ロー」、「春一番」、「南岸低気圧」、「二つ玉低気圧」、「擬似晴天」。実況天気図の気圧配置の推移、その比較検討や、予想天気図から将来の天気を予想する方法について解説があった。

「ポーラー・ローなる言葉は初めて聞いた」とはある会員の言葉であるが、私も同様である。「ポーラーローは、天気図で見ると小さな低気圧で目立たないが、強い寒気を伴っているため、大気の状態が不安定で、ポーラーローが通過する付近では猛烈な暴風雪が荒れ狂う。冬山の気象遭難の50%は、ポーラーローによると言われている」とのこと。見落としやすい典型的なタイプと思う。今後注意したい。

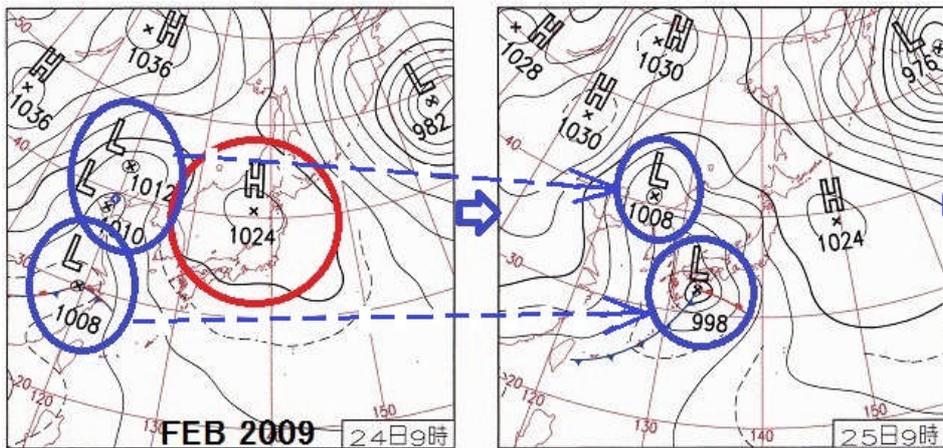


(ポーラーローが日本海に発生した時の天気図とポーラーローの衛星画像 [左の天気図とは別日])

南岸低気圧は関東の広い山域に雪を降らせるので、山をやる人は誰もが知っていると思う。私などは天気予報で「南岸低気圧が・・・」と聞いてはじめて注視するが、台湾付近で前線にキックが発生すると南岸低気圧になりやすいらしい。とするとかなり前から予測できることになる（下図参照）。



二つ玉低気圧も大荒れの天候となるので誰もが知っていると思うが、これも台湾付近の低気圧を注視すると予測できるようだ(下図)。やはりこの世界は奥域が深い。



最初にチェックすべきは、低気圧の位置・勢力など。悪天候をもたらす気象の要素には、気圧配置、低気圧の位置と配置、移動の方向と速度、・・・等々多数あるが、要は、地上の低気圧・前線の位置と強さが前日、前々日と比較してどのように推移してきたか [地上天気図で]、及び上空の低気圧・気圧の谷と偏西風の推移 [高層天気図で] を予測することによって、天気推移を予想することが肝要。

低気圧が発達するかどうかの天気図上のポイントは、「寒冷前線と温暖前線との角度がおおきい時」、「寒冷前線をはさんだ南北の気温差が大きい時」、「上層(500hPa 高層天気図)で、気圧の谷(トラフ)が地上低気圧の西側にある時」など。

低気圧が発達しそうであれば、山行は中止、既に山中にいる場合は、早めに撤退することが遭難防止になることは言うまでもない。春山でも悪天候に捕まり、低体温になって遭難してしまう事例は多い。特に春山は急激に変化することがあることを強く認識しておくべきと思う。

一度受講しただけではなかなか身につかないが、天気図の見方が少し深くなったように思う。それにしても大塚会員はなかなか勉強家だ。第2弾のレクチャーもお願いしたいものだ。

ありがとうございました。

以上